

ID 視点から検討した専門職の自己リフレクション支援 ーキャリアコンサルタント向けの教材開発ー

Professional Self-Reflection Support Examined from an ID Perspective -Development of educational materials for career consultants-

星野 宏^{*1}, 久保田 真一郎^{*1}, 川越 明日香^{*1}, 合田 美子^{*1}
Hiroshi HOSHINO^{*1}, Shin-Ichiro KUBOTA^{*1}, Asuka KAWAGOE^{*1}, Yoshiko GODA^{*1}

^{*1}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1}Graduate school of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: hhoshino@go.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あらまし: 本研究では, 専門職である国家資格キャリアコンサルタントのリフレクションを支援する教材を開発した。リフレクティブサイクルとプロセスレコードの場面再構成法を用いて, 実施した個別キャリアコンサルティングを自分でリフレクションし, 自らの成長課題に気づき, その克服に向けた行動目標の設定を目標にして, 手順書やチェックリスト, ワークシート等を開発し, 有用性を確認した。

キーワード: 自己リフレクション, リフレクティブサイクル, インストラクショナルデザイン

1. はじめに

社会環境の変化に伴い, 個人の価値観や働き方が多様化する中, 個人のキャリア形成に関する支援の必要性が高まっている。キャリアコンサルタントは 2016 年に国家資格となり, 登録者数が増加する一方で, 専門性の維持と資質向上が課題となっている(厚生労働省 2020)⁽¹⁾。

資質向上においては, 指導者の支援のもと実施した支援を自己評価して, 自分の成長課題を明らかにする取り組み(スーパービジョン)に高い効果があると期待されているが(宮城 2013)⁽²⁾, スーパービジョンを受けているキャリアコンサルタントは約 1 割と報告されている(下村ほか 2023)⁽³⁾。

医療・福祉や教育分野では, 指導者の支援のほかに, 自らの支援の傾向や問題を見出す学習ツールとして自己リフレクションが機能するとされている(大山 2006)⁽⁴⁾。

そこで, 本研究では, ID (インストラクショナルデザイン) の視点から, 自己リフレクションによって, 実施した支援を自己評価できる教材を開発し, 有用性を評価した。

2. 研究の概要

2.1 研究の対象と手順

本研究は, キャリアコンサルタントに特化した自己リフレクション教材の開発であるため, 研究対象は国家資格キャリアコンサルタント登録者とした。研究の手順は ID の体系的アプローチである ADDIE モデルに沿って進めた。

研究協力に申し出があったキャリアコンサルタントに対して, 協力者に不利益が生じない説明と個人情報保護, 研究協力撤回の自由の説明を文書と口頭で行い, 調査協力の同意書を得た。また, 本研究は, 熊本大学大学院人文社会科学部で倫理

審査を受けて承認された。

2.2 教材の設計と開発

教材は, Gibbs (1988)⁽⁵⁾のリフレクティブサイクルとプロセスレコードの再構成法(Peplau 1952)⁽⁶⁾を用いて図 1 の通り設計した。

まず, 実施した個別キャリアコンサルティング面談について, 星野 (2024)⁽⁷⁾が開発したチェックリストを用いて客観的に評価をする(①)。評価結果をもとに, 細かく分析したい場面を選択(②)して, ワークシートへ場面の選択理由とともに, 具体的な面談場面での相談者とやり取りを想起して記述する(③)。選択した場面における自分の思考や言動, 感情と, 自分が捉えていた相談者の思考, 言動, 感情を記述する(④)。③④を経て選択した面談場面において, できたこととできなかったことを評価して記述する

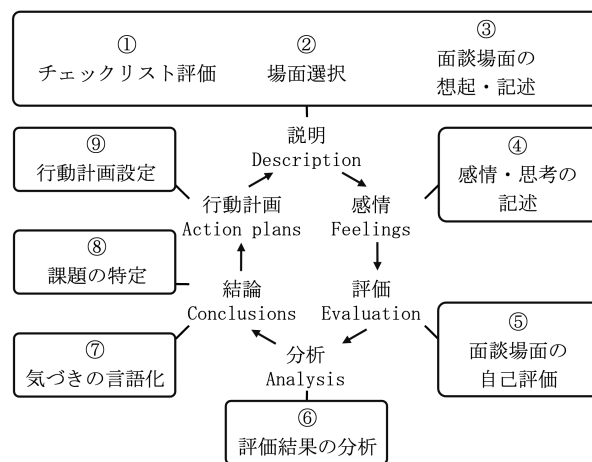


図 1 リフレクティブサイクルと教材の関係

(⑤). ⑤で記述した事象に対して、面談中の自分を分析し、できた理由とできなかった理由を記述する(⑥). ⑤⑥を経て得られた気づきを記述する(⑦). ⑦の結果をもとに、キャリアコンサルタントとしての成長課題を特定し(⑧), 克服に向けた行動計画を設定する(⑨).

3. IDからの考慮点

本研究は、IDの知見を用いて、効果的・効率的・魅力的に自己リフレクションを支援できるよう考慮した。向後(2019)⁽⁸⁾が述べている教育工学研究における3つの指向性(現場の改善, 同種の実践に還元, 理論に寄与)を意識して、教材の開発過程での評価と改善を重視した。

評価は、まずID専門家1名へのレビューにより、背景に用いたIDに関する理論の妥当性を評価した。ID専門家の評価によって、自己リフレクションの流れを体系化する教材設計の試みは有効だが、自己リフレクションであるため、独り立ちに関する指摘が多く、独学教材に向けて主に次の点を改善した。

- 教材冒頭にリフレクションの必要性和学習目標を明示。
- リフレクションに対する足場がけとして、ワークシートの記入例と記入過程の思考を可視化したテキストを追加。

次に、キャリアコンサルタント向け教材の妥当性評価のために、キャリア領域の研究者と実務家2名によるエキスパートレビューを行なった。この評価では、学習者が自己の成長課題を把握できる妥当性は確認できたが、レベルに応じた配慮不足の指摘があり、主に次の点を改善した。

- 用語集を追加し、初学者でも使用できるようにした。前提テストは、時間的な負担を考慮して設けなかった。
- 記入例の解説を、標準レベルの架空のキャリアコンサルタント視点で追記した。

上記改善後の教材について、国家資格キャリアコンサルタント2名による1対1の形成的評価を実施し、学習者視点での改善点を抽出した。形成的評価では、教材使用時の意欲が自己リフレクションに取り組む姿勢に影響する可能性があるとの仮説を立て、主に次の点を改善した。

- 教材への動機づけを高めるために、ARCSモデルに沿って、探究心の喚起を狙った問いかけの表記や、学習者のペースで取り組める進め方の選択肢の提示を記載した。

改善後の教材を23名に実地テストし、教材による自己リフレクションの有用性を評価した。

4. 今後の課題

本研究では、IDの知見を用いて、自己リフレクションができる教材を開発し、一定の有用性を明らかにできた。一方で、リフレクション自体への動機

づけや、リフレクション過程の効率化に課題が残った。本教材は、原則、紙で印刷し、内省の成果を手書きで言語化する設計とした。また、リフレクションの成果も電子化せず、教材に書き込み蓄積して保管する流れになっており、実地テスト後のインタビューでは、手間がかかったと意見があった。

今後、ICTを用いて、教材の電子化やリフレクション成果のデジタルでの蓄積と保管を検討したい。電子データでの蓄積によって、テキストマイニング等による客観的な分析や、リフレクション成果のタグづけによる分類、他者との成果共有による協働学習の促進など、学習の幅を広げられると考える。

一方で、ツールやデバイスの導入には、紙媒体よりもコストが増加する可能性や、ICTに関する知識や操作技術、情報リテラシーなど、デジタルデバイスによる学習機会の損失につながる懸念がある。

本領域の研究では、現場の改善につながる成果が必要だと考える。IDとLT(ラーニングテクノロジー)を用いて、どれだけ良い教材を開発して有用性を評価できたとしても、実際に現場で使用できる教材を目指す必要がある。そのためには、本研究では考慮をしていなかった、ICTを用いた場合の学習成果や、教材を使用する学習者のICT面の前提条件、開発コスト、学習者のランニングコスト等も検討しなければならないと考える。

5. 参考文献

- (1) 厚生労働省: “キャリアコンサルタントの継続的な学びの促進等に関する報告書”, <https://www.mhlw.go.jp/content/11805001/000621255.pdf> (参照 2025.04.24)
- (2) 宮城まり子: “キャリアアカウンセラーの質的向上とスーパービジョン: SVの必要性和役割に関する一考察”, 生涯学習とキャリアデザイン, Vol.11, pp.3-17 (2013)
- (3) 下村英雄, 高橋浩, 前田具美, 新目真紀: “第2回キャリアコンサルタント登録者の活動状況等に関する調査”, 独立行政法人労働政策研究・研修機構労働政策研究報告書 No.227, <https://www.jil.go.jp/institute/reports/2023/documents/0227.pdf> (参照 2025.04.24)
- (4) 大山博幸: “援助場面での「わたし」を対象とする自己リフレクション研究-自己覚知概念との関連とその方法論的立場-”, 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, Vol.4, pp.129-140 (2006)
- (5) Gibbs, G.: “Learning by Doing: A Guide to Teaching and Learning Methods”, Oxford Brooks University, Oxford (1988)
- (6) Peplau, H.: “Interpersonal Relations in Nursing: A Conceptual Frame of Reference for Psychodynamic Nursing”, G. P. Putnam's Sons, New York (1952)
- (7) 星野宏, 久保田真一郎, 川越明日香, 合田美子: “キャリアコンサルタントの自己リフレクション項目抽出の試み”, 日本教育工学会 2024 年秋季全国大会予稿集, pp.583-584 (2024)
- (8) 向後千春: “インストラクショナルデザイン研究の方法論”, 日本教育工学会論文誌, Vol.43, No.3, pp.207-214 (2019)